

インド版アニメ『忍者ハットリくん』をよろしくござる

法学部 4 回生 長谷 悠太

・イントロダクション

藤子ファンの方ならご存知という方も多いのではなかろうか。④先生の『忍者ハットリくん』が、インドの忍者ブームに乗って大人気を博して遂には新作アニメが製作されることとなり、日本でも逆輸入の形として今年 5 月からアニマックスで放送されたのである。11 月 4 日放送分をもって全 26 回 52 話の放送が終了した。本稿では視聴した感想を簡単にまとめることにする。なお、シンエイ版はほとんど視聴したことがなく、ほぼ原作にしか触れていない者の感想ということを予め断っておく。そして便宜上、最初に発表された漫画原作を旧原作、80 年代に放送されたアニメをシンエイ版、それに合わせた新設定での原作を新原作、シンエイ版と新原作の両方を指す場合は新版と呼ぶことにする。

まずは作品について。『忍者ハットリくん』では、伊賀の少年忍者ハットリカンゾウが東京の小学生三葉ケン（アニメではケンイチとも）の家に居候しながら忍者修行に励む。忍者文化と都会文化の違いが起こすドタバタや、伊賀と甲賀のライバル対決が繰り広げられ、アニメが生んだ名言「ズコー」をはじめギャグと忍者知識が織り込まれた作品である。さしあたり紹介すべき登場人物は上記の二人のほか、弟のシンゾウや忍者犬獅子丸、甲賀の少年忍者ケムマキと忍者猫影千代、クラスメートの夢子というところだろうか。

シンエイ版は 1981 年から 87 年までテレビ朝日系列で放送された長寿アニメだ。アニメ放送をきっかけとして、原作も時代に合わせた新設定で新たに描かれることになった。獅子丸や影千代、夢子などはこの新版によって新たに作り出されたキャラクターである。ちなみに、アニメ化をきっかけに新原作が描かれるといった経緯は F 作品の『パーマン』と似たようなものがある。

・スタッフ・キャストなど

インドで製作されたとはいえ、藤子スタジオ側がストーリーを作るなど日本側が核の部分を作って、アニメーションをインドに発注するような形といってよいだろう。監督は藤子アニメにも多く関わっておられるやすみ哲夫さんが務めた。現在放送中の『ドラえもん』スタッフからもキャラデザ担当を富永貞義さんが、脚本を清水東さんなどが担当されておられるということは注目に値する。今の F アニメ担当者が④アニメにも関わるというのは、それだけで素晴らしいことではなかろうか。

アニメの実質的なリニューアル、それも約 25 年ぶりともなれば、旧作のファンが気になってしまうことのひとつが声優だと思ふ（肯定否定についてはさておき）。ハットリくんの声と言えばチンプイや『新オバケの Q 太郎』の Q 太郎でおなじみの堀洵子さんである。

どこか抜けた感じがして、それでいて愛らしい獅子丸の声は緒方賢一さん。シンエイ版のお二人の声は一度でも耳にすれば忘れがたいものがあるが、インド版でもそのまま続投されることに。その他のキャストは交代となった。藤子アニメに欠かせない存在である肝付兼太さんがケムマキ役を続投されるかにも関心が集まっていたが、小川一樹さんが務めることとなった。この他、ケンイチ役を天神林ともみさん、シンゾウ役を日向ゆきこさん、影千代役を深田愛衣さん、夢子役を佐藤晴香さんなど、若い声優さんが起用されている。ちなみに、ケンイチのパパママも含めて新キャストの方々はいずれも、ぷろだくしょんバオバブに所属されているようである。

で、実際のアニメを見てみて。オールドファンの方は物申したいものがあるのかもしれないが、シンエイ版に全くと言ってよいほど触れていない新参者の私としては何ら違和感がない。大山ドラを全く観たことがなく、わさドラから入った今のちびっ子たちの心境が、今なら少しわかるような気がする。小川ケムマキを聞く限り、シンエイ版の肝付さんの声にこだわりすぎることもないのではなかろうかと感じた。私からすればちゃんとケムマキになっている。この変化は 21 世紀のハットリくんのアニメであると言わしめる象徴の一つと言ってよいかもしれない。天神林さんのケンイチは大原めぐみさんののび太に通じるものがあるような気が。語彙力がなくて申し訳ないのだが、このケンイチにせよのび太にせよ、藤子作品の主人公少年ってこんな感じだよなあという声なのだ（完全に主観的意見です）。深田影千代の「ニャリーン」「ごまりんたま（ご主人さま）」のかわいすぎることと言ったら。堀ハットリと緒方獅子丸はより柔らかな語り口になっているような気がして落ち着く。堀さんの「～のまっ↑き～↓」というサブタイトル読み上げを再び聴けるだけでも価値がある。改めて、今回のキャストと新声優のみなさんの研究には恐れ入った。

・アニメーション、ストーリーなど

インド版では作画は CG である。とてもきれいで、忍者ならではの素早い動き（駆ける動作や高所からの飛び降りなど）や背景の描写に活かされていると思う。…が、フラッシュアニメーション（素人ゆえ違うかもしれない）のような独特の動き方は、今の日本のアニメではほとんど見られないからか、やや違和感がある。だからこそインドで作っていることを実感させられる。口の動きはインド版に合わせているようでやや早めか。

ストーリーについて。30 分 2 話形式であり、シンエイ版¹と比べると 1 話あたりの尺が長い。テンポが遅いように感じる時があるが、一つの話をとことん掘り下げられるという意味ではよいだろう。また、2012 年当時の東京でのお話という設定がなされている。インドで作られているからといって、インドらしい描写はほぼない²。第 4 話Aパート『サ

¹ 初期は 10 分帯のため 1 話 6 分、後に 10 分のものも登場。http://f-daisuki.net/anime/box-2.htm より。

² 放送終盤になってインド製作を思わせる話が。例えば 24 話 B パート『クイズ王は誰だ!?でござる』ではクリケットの人数を尋ねる出題や地図シルエットを見て国名インドを答える出題があった。最終話 26 話 B パートは『クリケットに挑戦でござる』と全編にわたってインドらしさを感じさせてくれた（笑）

ラリーマンは大変でござる』ではパソコンのメールが登場するなど、現代版としてのオリジナルが随所に見られる。25年前よりはるかに発達した、忍者とはますます無縁になっていく現代社会でのハットリくんも面白いものだ。

キャラクタについて。私の頭のイメージのハットリくんとは違う。ケンイチの親友として、シンゾウの尊敬する兄として、ケムマキのよきライバルとして、その点は満たしているが、どうもカッコいい・強い要素が足りないように感じるのだ。子供っぽいところが強調され、詰め甘いところが多めの印象。8話Bパート『からくり自転車はスゴイでござる』ではケムマキに対抗意識を燃やしてやりすぎを反省するほどに自転車改造に熱中するし、22話Aパート『決死のドライブでござる』では、遊園地のガイドブックに印を付けてシンゾウにからかわれて思わず照れるほど熱心に読み込んでいた。年相応の男の子らしいと言えばそれまでだが、ハットリくんの不完全なヒーローキャラが、アニメによりギャグテイストを効かせている。個人的には、良からぬ大人を正したり、事件を解決したりというようなカッコいいカン様をもっと見たかった。

夢子ちゃんは多趣味でマイペースすぎるところが面白い。学校の授業の一環として開かれたファッションショーでは個性的なデザインの服を考案しハットリくんたちに（無理やり）モデルとなってもらったし、にわかに興味を持った占いでは男子一同を大いに振り回してくれた。さらに普通の男の子ケンイチと忍者ハットリ・ケムマキを全く平等に見ているのか、忍者だからできるという難題でも、ケンイチにやってみせてと言わんばかり（というか言っている）なのだ。ケンイチもケンイチでハンデをもろともせずケムマキに対して「また点数稼ぎ」とライバル心を燃やしている。みんなのマドンナの地位は揺るがないのだ。さすが夢子ちゃんである。他には、獅子丸の「イカリ火の玉」や影千代の「シビレネコ」も登場したのは良かった。そして本来は敵同士のはずである伊賀甲賀が時に見せる連携（絆や友情）の良さについて描いた回もちゃんとあり満足。

・最後に

逆輸入されることは制作発表の段階で知って心待ちにしていたものだが、専門チャンネルでの放送というのは驚きだった。たまたま視聴できる環境にあったからよかったが、テレビ朝日が制作に関わっている以上はてっきりテレ朝系列でやるものとはばかり思っていたのだ（テレ朝チャンネルで放送する可能性もあったわけだが）。視聴しにくい環境にあるため、ネット検索をしてもあまり感想や評価は見られない。ただ、無料放送期間に視聴できた藤子ファンの方の反応は、（ツイッターで親交のある方々という狭い範囲しか見られていないが）おおむね良好に感じられる。地上波や円盤などで視聴できるようになれば裾野が広がってコアなファン以外の視聴も増え、様々な感想が目にするようになると思われる。この半年間、新しい藤子アニメを見られるということ、そして楽しいストーリーに魅せられて、とても幸せだった。この気持ちをもっと多くの藤子ファンや子供たちと共有できれば。ああ、ぜひ地上波再放送や第2期をやってほしいものだ。